

この度、ARCLE REVIEW 第4号が刊行された。本号では特に、高等学校・大学における英語教育に焦点を当てている。高校ではオーラル・コミュニケーションの重要性が叫ばれて久しいが、いまだに文法訳読中心の英語教育が主流をなしている。ただし近年の第二言語習得研究からすると、単に文法訳読中心だからだめ、という単純な問題ではない。文法など、言語形式のコミュニケーションにおける重要性を再認識しているのである。

大切なのは、授業の中で教師と生徒、生徒と生徒の間でどのようなインタラクションがあるかである。勿論やりとりが英語でされていれば一番良いのだが、たとえ日本語が使用されてもそれを通して生徒が英語の語彙や文法・意味に気づき、理解が深まれば、学習効果は上がるのである。

本号では、文法訳読の授業における生徒と教師のやりとりがその後のアップテイクに与える影響を見た結果、教師が一方向的に教えるよりも、生徒が質問したり他の生徒とやりとりをした方がアップテイクされやすいことが明らかになった。インタラクションが英語学習に大切だということである。さらに興味深いことは、インタラクションについて日常会話レベルのものではなく、むしろ CALP(学習言語能力)レベルのもの的重要性が示されたことである。文法学習の重要性についての理論的側面からの指摘も踏まえ、それらを collaborative dialogue を通して自らも考えながら理解・学習することが大切なのである。

また別の論文では、東アジア3カ国の高校生の英語力の比較調査の結果、「自信度」という心理的な要因が英語力と関係があることが示唆されている。この自信度は、日韓の高校生徒の比較調査から、英語に触れた「経験度」と関係がありそうだということも分かった。これらの調査及び、SELHi・非 SELHi 校の比較調査から、英語を意味のある環境で体験し、その中で学ぶことの重要性が指摘された。では、高校生にとって最も意味がある英語の経験とはどのようなものだろうか。日常的な経験なのか、それとも上述のような、より認知的に高度な経験なのか。これらについては今後さらなる研究が必要であろう。

本号収録の大学生の作文の研究では、文章の文法的、意味的結束性の大きさが指摘されている。意味の一貫性、結束性が作文能力を判定する上で大切なことはこれまでの研究からも明らかであったが、本研究では上級者を対象に2つの異なった文体においてもそれらが確認された。ここでも、コミュニケーションにおける語彙や文法知識の大切さが見られる。

他にも、汎用性が高く、近年ヨーロッパを越えて世界中で研究されている CEFR の、リスニングの基準特性に関する研究が収録されている。また、第二言語の Fluency 評価についての母語との関係性やタスクによる個人差についての研究、早期英語教育に関連してリタラシー教育の重要性を示唆した研究、英語家庭学習の効果についての研究、小学校「外国語活動」の評価についての研究、そして新しい文法指導の観点から、新学習指導要領を具体的にどのように実現させるかについての研究が掲載されている。

今後も ARCLE は、教育現場と直結した課題を見つけ、その解決をしていくためのアクション・リサーチを推進し、日本の英語教育の改善のために研究を進めていく所存である。

上智大学一般外国語教育センター長・教授 / ARCLE代表

吉田研作